

行雲流水

No.201 令和4年4月18日発行

育てる者の矜持

校長 寒河江 正人

昔から**自然と調和**して生きてきた日本人。

人だけでなく、物や自然に対しても、**尊敬と感謝の念**をもって

相手にまっすぐ向き合い、受け入れ、同化しようと試み続けてきた心から生まれた文化。

そんな日本人の繁栄を支えてきてくれた稲作。

稲作には、日本人の「**知恵と心**」が詰まっている。

「**田んぼの肥やしは、人の足音**」

「**稲は、主人の足音を聞いて育つ**」

「**足音を田んぼにたくさん聞かせてあげなさい**」

春の低温、夏の日照り、気象条件は、年々刻々と変化する。

ほったらかしでは、「**いい稲**」は決して育たない。

条件の悪い時こそ、農家の「**腕の見せどころ**」だ。

足繁く田んぼに通い、日々変わっていく「**稲の様子**」をつぶさに観察し、

あれこれ考え、工夫して、効果的と思われる対策「**打てる手**」をとにかく打っていく。

稲とは「**実際の会話**」はできないのだけれど、

その根底には、まるで「**稲の気持ち**」を懸命に理解しようとしているような

「**圧倒的な同化力**」と「**稲（相手）に対する尊敬と感謝の念**」が感じられる。

ここまで話せば、もうご理解いただけるだろう。

「稲」は「**生徒**」、「田んぼ」は「**教室**」、「気象条件」は「**能力・特性などの実態**」。

そして、「打てる手」とは

「**生徒理解・家庭理解に立ち、その子なりの自己実現に向けた個別最適化した指導・支援**」。

自分を取り巻く周囲のあらゆるものに対し、**尊敬と感謝**をもって、**探究に専念**すること。

それが「**育てる者**」「**育てる立場**」の「**心・矜持**」と言えよう。